

ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる島っ子の育成  
～修学旅行にかかわる実践の深化・充実を通して～

- 1 主題設定の理由
- 2 研究の概要
- 3 研究の実際
- 4 研究の成果
- 5 今後の課題

第22分科会  
地域における教育改革とPTA  
(過密・過疎、へき地の教育)  
大澤 彰介 (知教連・日間賀中)

## 研究の概要報告

### 1. レポート内容にみる県内の教育実践の状況

今次の「過密・過疎、へき地の教育」分科会における一つめのレポートは、固定化された人間関係の改善と理科学習の改善をめざした、横断的かつ対話的な学習による理科教育実践であった。本実践では、少人数学級という特性をいかし、クラスメートそれぞれの考えが書かれた全員のホワイトボードを見比べながらの話し合いなどが、大きなポイントとなっていたと考えられる。

二つめのレポートは、他者とのかかわりの深化、学校図書館教育の充実、体育科学習の改善をめざした、ICT機器を活用した対話的な手だてによるマツト運動の実践であった。本実践では、小規模校の特性をいかし、学校図書館横のワークスペースを活動場所にするとともに、マツト運動に関する本を活動場所近くに配置するなどの学習環境整備の工夫がなされ、そのことが実践の展開に有効に作用していたと考えられる。

三つめのレポートは、小規模校であるがゆえに大勢の前で話すことが苦手という課題解決にむけた、ICT機器を活用した小規模校どうしの交流の実践である。本実践では、自治体内にある小規模校3校で交流会を行うことで、互いの学校のコミュニケーション能力を育むとりくみとともに、遠隔交流も可能であるICT機器の利点をいかした事前のオンライン交流が、大きなポイントとなっていたと考えられる。

四つめのレポートは、島のことを自分事として考えられる子どもを育てるためにとりくまれた、修学旅行にむけてふるさとの魅力を考える横断的な教育実践であった。本実践では、地域の中で互いに顔が見える関係で協力が得られやすいという小規模校の特性をいかして、観光協会などの協力を得ながらの横断的なとりくみが行われ、日常的にふるさとについて考える状況をつくり出したことが、実践の展開に有効に作用していたと考えられる。

五つめのレポートは、古代と現代のくらしの関連について考えさせるとともに、山間地であるふるさとのよさについて考えさせることができる子どもの育成をめざした、古代の郷土の歴史学習と生徒会による川の清掃活動を関連づけた教育実践であった。本実践では、子どもたちの声に応じた小規模校ならではの臨機応変な学習の展開、活動のすばらしさだけではなくたいへんさにも注目させる地域講師による地域づくり実践に関する授業などが、実践の大きなポイントとなっていたと考えられる。

以上のように、いずれのレポートも、小規模校の特性をいかしながら子どもの成長・発達をめぐる課題解決を期したものであった。

### 2. 討議された内容

討議では、五つのレポートと関連づけながら、小規模校の特性をいかした教育実践のあり方、地域と結びついた教育実践のあり方について意見が交わされた。ICT機器活用をめぐるメリット・デメリット、学校と地域のパイプ役の存在の大切さ、複式学級の課題と可能性などを中心に有意義な討論が展開された。

(中山弘之 稲垣安明)

## 報告書のできるまで

この報告書は、分会での討議、教組ごとに研究集会を経て作成されたものである。

第71次教育研究愛知県集會に提出されたリポートは5本である。どのリポートも、各教組、各分会の実態をふまえたものであり、地域とのかかわりに力を入れ、素材や人材を有効に活用した実践の報告である。研究主題は以下の通りである。

- ・ 子どもに身につけさせたい力を明確にし、小規模校の利点をいかした教育支援のあり方
- ・ 過密・過疎へき地における地域の「ひと」の思いにふれる教育活動のあり方

なお、わたくしたちの研究実践に対して、適切なお指導・ご助言をいただいた各先生方から感謝します。

助 言 者	中山 弘之（愛知教育大学）	稲垣 安明（北設・田口小）
分科会教研推進委員	鈴木 悠里（北設・東栄中）	酒井 厚志（知教連・大府南中）
	清水 洸希（豊田・足助小）	近藤 駿（名古屋・大森中）
	森田 晃司（知教連・日間賀小）	加藤 敦也（新城・黄柳川小）

## 1 主題設定の理由

### (1) 日間賀中学校の概要

日間賀島は三河湾に位置する離島であり、島内唯一の中学校である本校には64人の生徒が在籍している。本校は日間賀小学校と敷地が隣接しており、9年間の児童生徒の成長を見通して、行事や会議の合同実施、授業の相互交流など、連携を密に取っている。また、保護者は主に漁業や観光業を営み、将来は家業を継ごうと考えている生徒も多にいる。保護者をはじめ地域の方々は、生徒や教職員によく声をかけてくれたり、学校行事に積極的に参加してくれたりするなど、学校に対してとても協力的である。このような環境の中、生徒は幼少期より島に愛着をもって育ち、島の将来に自分自身の姿を重ねながら成長している。本校は「未来の創り手となる島っ子」の育成をめざし、小中連携・地域連携を推進して教育活動を行っている。

### (2) 2020年度までの修学旅行にかかわる実践

2018年度の修学旅行より、本校は日間賀島観光協会などの協力を得ながら、以下のような実践を進めてきた。

○離島の魅力を再認識するための「離島キッチン（アンテナショップ）での活動」

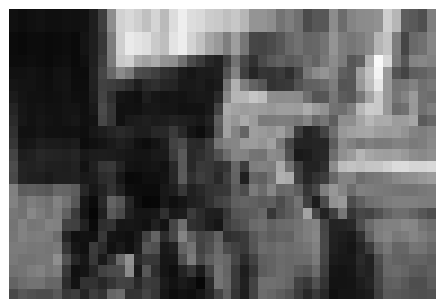
○自分自身の視野を広げるためのキャリア教育「東京の私立女子大学との交流」

○日間賀島の魅力を発信するための東京駅での「日間賀島PR活動」

当日に至るまでに、事前学習として総合的な学習の時間（本校では、キャリア学習に関するカリキュラムをHimaka Island Nagamine Time B=HintBとしている。以下HB）において日間賀島の観光の歴史について講話を聴いたり、技術科では日間賀島を紹介するためのPRスライドを作成したり、英語科では技術科で作成したPRスライドを英訳したりしている。

本校は修学旅行にかかわる実践を通して、地域と連携をはかり、教科を横断しながらカリキュラム・マネジメントを推進している。これらは、日間賀島の将来の一翼を担う意義深い活動となっている。

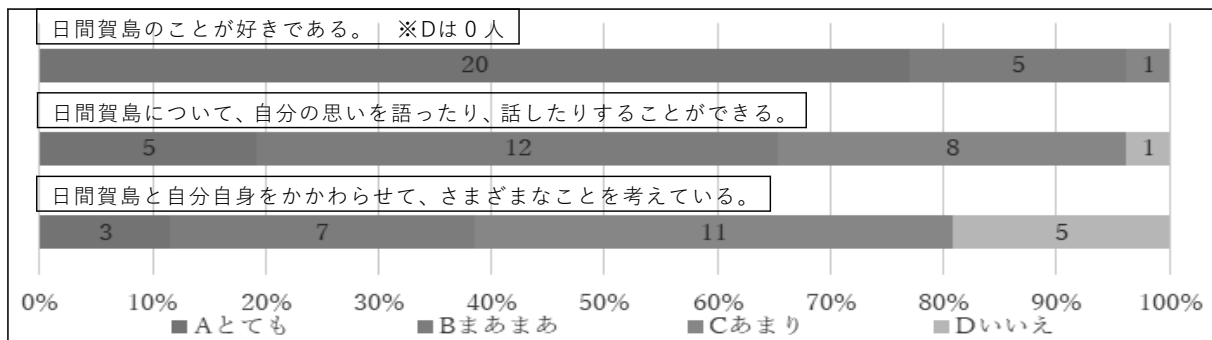
※2020年度については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、東京方面への修学旅行の実施を見合わせた。



【2019年度 東京駅でPR活動の様子】

### (3) 本学年の実態

修学旅行の事前アンケートにおいて、「日間賀島のことが好きである。」という質問に対し、肯定的に回答した生徒が26人中25人いた。「日間賀島について、自分の思いを語ったり、話したりすることができる。」という質問に対しては17人の生徒が「とても」あるいは「まあまあ」と答えている。これは、小学校から総合的な学習の時間を中心として行ってきた郷土学習の積み重ねや、本年度で6年目を迎える「日間賀サミット」という地域の方々と島の現状や将来について語り合う行事の成果だと考えられる。しかし、「日間賀島と自分自身をかかわらせて、さまざまなことを考えている。」という質問に対しては、半数以上の16人の生徒が「あまり」あるいは「いいえ」と回答した。その理由を、「日間賀島について詳しく知らないこともあるから。」「日頃からは考えられていないから。」とあげていた。



【事前アンケートの結果】

## 2 研究の概要

### (1) 「めざす子ども像」と「育てたい資質・能力」

日間賀小学校・中学校では、小中連携を推進するために9年間を見通した「めざす子ども像」と「育てたい資質・能力」を以下のように設定している。

「めざす子ども像」

◎過去・現在・未来の日間賀島について、自分事として語れる子

「育てたい資質・能力」

#### ○問題解決力

・自ら課題を見出し、主体的に解決しようとする力

#### ○理解力・読解力（読み取る力・感じ取る力）

・対象や課題に向き合い、既習内容や経験をふまえて自分の考えをもつ力  
 ・相手の考えを受け止め、自分の考えをもつ力

#### ○コミュニケーション力（対話する力）

・明るく元気にあいさつできる力  
 ・自分の意見や考えを発表する力、情報発信力  
 ・友だちの意見や考えの要点をとらえて理解できる力

#### ○協働する力

・相手を認め、尊重する態度  
 ・異なる意見から折り合いをつける力（調整力）

#### ○地域に貢献する意欲・態度

・日間賀島にかかわる知識を身につけ、よりよい島づくりに参画・貢献する態度  
 ・学習したことを地域や生活の中でいかす力

### (2) 研究の仮説

#### 仮説1

教科間での連携をはかりながら効果的にカリキュラム・マネジメントを推進し、日間賀島と自分自身をかかわらせて考える活動をより充実させることができれば、「育てたい資質・能力」を育むことにつながるであろう。

#### 仮説2

日間賀島について学習したことや自分自身の思いをまとめたり、発信したりする場を設定すれば、「日間賀島について、自分事として語れる子」が育つであろう。

(3) 研究の手だて

仮説 1 に対する手だて

訪問前に農林水産省、東京の私立女子大学とリモートで交流したり、離島キッチンに設置するパンフレットやアンケートを作成したりする。その際に、各活動をさまざまな教科と関連づけて行う。

仮説 2 に対する手だて

小・中 9 年間で系統的に学習したことや新たに得た知識を用いて、各活動で日間賀島についてや自分たちが中学校で活動していることについて紹介する。

(4) 研究構想図



### 3 研究の実際

#### (1) 農林水産省との交流にむけて

社会科地理的分野「中国・四国地方」（第2学年）の単元において、農林水産省が推進している事業である「SAVOR JAPAN」を取り扱った。「SAVOR JAPAN」は、地域のブランド力を高め、訪日外国人を中心に日本食・食文化体験を通じた交流人口の増大と地域振興を目的としている。2020年度には、日間賀島を含めた南知多町も「SAVOR JAPAN」に認可された。南知多町や日間賀島は少子高齢化と人口の減少がすすんでおり、観光客を中心とした交流人口の増加をめざしている。本単元で学習する中国・四国地方は、限界集落が全国で最も多く、過疎化が深刻な地域である。この現状を改善するために、中国・四国地方では地域振興の一環である「まちおこし・むらおこし」を積極的に行っている。同じような課題を抱え、改善へのとりくみを推進している中国・四国地方と日間賀島を比較したり、関連づけたりしながら学習をすすめることにした。

はじめに「SAVOR JAPAN」について、冊子とインターネットを活用して調べ学習を行った。生徒は、「SAVOR JAPANを見ていると、その地域に行ってみたくて思ったし、その土地の食べ物を味わってみたいと思った」「南知多町が載っているのがとてもうれしかったし、誇らしい」と語っていた。中国・四国地方の学習をすすめると、生徒は日間賀島との共通点をしっかりとらえ、「まちおこし・むらおこしが地域活性化に重要である」「地域活性化が観光客を呼び込み、その地域の経済を保っていくことにつながる」と学習をまとめた。



【授業でまとめを行う様子】

中国・四国地方の学習を終えたところで、生徒に「修学旅行で農林水産省に訪問したいか」を尋ねたところ、8割以上の生徒が肯定的に回答した。その理由として「たくさん観光客を呼ぶために、他の地域がどのような工夫やとりくみをしているのか知りたい」「農林水産省はどのような場所で、南知多町や日間賀島とどのようにつながっているのか知りたい」などの意見があがった。

そこで、修学旅行で訪問する前にリモートでの交流を実施した。生徒は事前のHBにおいて、社会科での授業のとりくみや本校の教育活動についてのスライドを作成した。交流当日は、はじめにスライドを用いて、自分たちの学習の様子について説明した。その後、農林水産省の方から、行政機関としての役割や「SAVOR JAPAN」の目的、日本の食文化について教えていただいた。生徒の振り返りには、「将来の日間賀島を盛り上げるための活動を大切にしていきたい」「日間賀島の魅力や伝統について理解して、たくさんの人に発信していきたい」などと記述されており、とても有意義な活動になった。

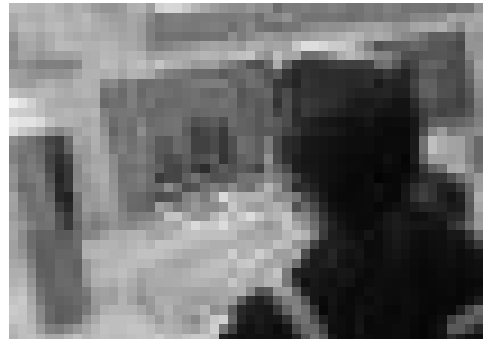


【学校の活動をリモートで紹介する様子】

#### (2) 日間賀島PR活動にむけて

社会科の学習に続いて、日間賀島PR活動のために「SAVOR JAPAN」をモチーフにしたPRスライド「SAVOR HIMAKA ISLAND」を、技術科「デジタル作品の設計・制作」の単元で

作成した。生徒は小学生の頃から行っている郷土学習で得た知識や、インターネットで調べたことなどを取り入れながら、PRスライドの構想を練り上げていた。全員の構想が固まってきたところで、お互いの構想を見せ合いながら、付箋を用いてよかった点・改善点を伝え合った。生徒の振り返りには「友だちのものには、島の形やおすすめスポットなど幅広く書かれていた」「読み手にいいなと思ってもらえるように読み手の気持ちになりながら作成するとよいと知れた」と記述されていた。その後、生徒は自分のPRスライドに必要な画像を島内で撮影し、集めた画像を用いてPRスライドを作成した。生徒はPR活動にむけて、「日間賀島にもっと観光客が増えて、にぎわってほしい」「多くの人に日間賀島を知ってもらい、魅力を伝えたい」という意気込みを語っていた。最後に、英語科「Presentation 2 町紹介」の単元において、PRスライドの英訳を作成し、修学旅行に備えていた。しかし、本年度になっても新型コロナウイルス感染症の拡大が収束するに至らず、本年度も東京駅でのPR活動の実施は見合わせる事になった。今後、他校との交流会でPR活動を実施したり、PR動画を作成したりする予定である。



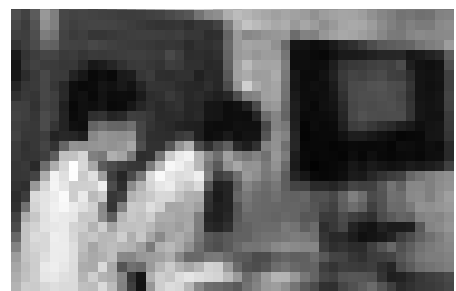
【PRスライドを作成する様子】

### (3) 離島キッチンでの活動にむけて

離島キッチンは、全国の離島の名産を取り揃えて販売したり、各地の食材を用いて料理を提供したりするアンテナショップである。また、離島に関する催事を行うためのイベントスペースとしても活用されており、本校は訪問した際に日間賀島の魅力を再認識するためのワークショップを行っている。本年度は、訪問前に離島キッチンに来店された方を対象とした離島に関するアンケートを実施し、そこで得られた回答から訪問した際の活動内容を検討することにした。あわせて、生徒が作成する「日間賀島観光パンフレット」を、アンケートとともに店舗に設置していただくことになった。

アンケートは、離島を訪れる観光客がどのようなところに離島の魅力を感じてるかを調査することを目的に行った。生徒は「2回以上訪れた魅力的な島はどこか」「いろいろな離島がとりくんでいることで、すごいと思ったことは何か」「日間賀島の主な魅力は①たこやふぐなどの料理②景色③釣り④海水浴である。気になるものはどれか」という三つに質問を厳選し、アンケートを作成していた。

パンフレットの作成は、HBの授業と国語科「実用的な文章を読もう」の単元と関連づけて行った。はじめにHBにおいて、生徒は昨年度までに先輩が作成したパンフレットを参考に構想を練った。その後、国語の授業において、さまざまな地域の観光パンフレットに目を通した。生徒は、「文章が短く簡潔である」「写真やイラストを多く使っている」「話題を絞っている」など、伝わりやすくするための工夫をとらえていた。次に、このような工夫を取り入れていくために、自分たちのパンフレットの構想を検討し直した。生徒からは「写真はインパクトのあるものを選ぶ」「吹き出しを使うと印象的になる」「グルメ情報は、名産であるタ



【構想を検討し直す様子】



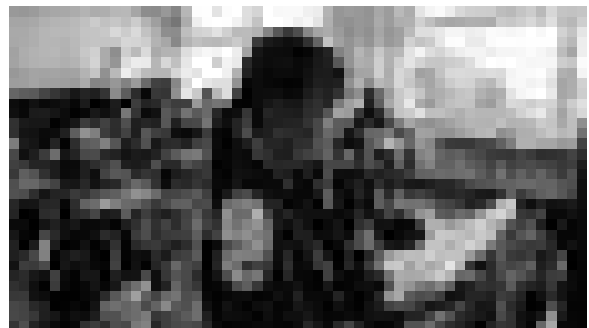
コやフグに絞ってはどうか」などの意見があがった。その後、これらの意見をふまえ、HBの授業でパンフレットを完成させた。

今後、アンケートの回答を生徒と共有し、どのような活動にいかしていけるか検討していく。また、「日間賀島観光パンフレット」は日間賀島PR活動において使用したり、日間賀島の観光スポットに設置していただいたりする予定である。

#### (4) 東京の私立女子大学との交流にむけて

交流を行った東京の私立女子大学は、新たなコミュニティを創造し、地域社会の担い手を育てる能力（コミュニティデザイン能力）を身につけることを目的としたカリキュラムを実施している。このカリキュラムの一環として、修学旅行生とともにキャンパス内の見学と浅草での街歩きを行っている。本年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、訪問時にキャンパス内の見学を見合わせなければならないことや交流に十分な時間が確保できない可能性があることなどをふまえ、訪問前にリモートでの交流を実施した。

はじめに、生徒はHBで作成したスライドを用いて修学旅行での活動内容や目的を紹介した。続いて、大学生の方々に大学のカリキュラムについて説明していただいたり、キャンパス内を画面越しに紹介していただいたりした。最後に、大学生の方々に大学生活や離島の印象など、さまざまな質問をし、答えていただいた。生徒の振り返りには、「大学生の方々のように、自分も好きなことや興味のあることを将来にいかしたい」「日間賀島には観光業にかかわり、支える人たちがいる。そういうことを将来の夢にしている人たちがいることを知れたし、すごいと思った」「日間賀島や離島に対して、親しみやすさがあるという魅力を教えていただいた。大学生の方が感じていることと自分が感じていることが同じで、日間賀島は人柄で観光客を集めているんだと改めて実感した」などと記述されていた。交流を通して、自分自身の将来について考えたり、日間賀島について客観的な視点を得たりすることができ、とても有意義な活動になった。



【修学旅行の目的をリモートで説明する様子】

## 4 研究の成果

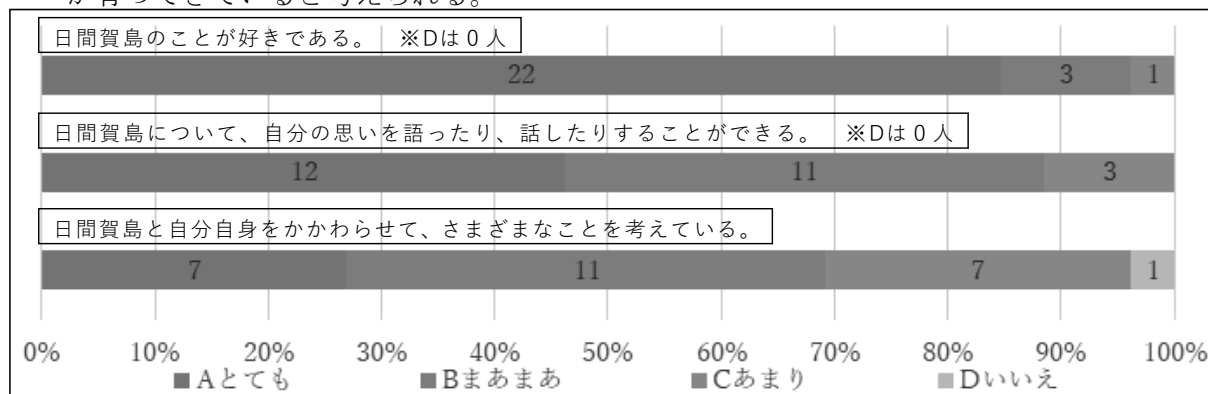
### (1) 仮説1に対する手だてについて

ここまでの活動について、再度アンケートを実施した。「日間賀島と自分自身をかかわらせて、さまざまなことを考えている」という項目については、「とても」「まあまあ」と答えた生徒が8人増加している。その理由として生徒は「自分がどうしたらこれからの日間賀島をよりよくしていけるか考えることができたから。(問題解決力)」「活動を通して、さまざまな人が、日間賀島についてどのように感じているか知ることができたから(理解力・読解力)」「自分がこれからも『日間賀島にいたい』と思える島を作っていきたいから(地域に貢献する意欲・態度)」などと回答していた。これらの回答や各活動での振

り返りなどの様子から、「育てたい資質・能力」の育成に一定の成果が得られたととらえることができる。

(2) **仮説2に対する手だて**について

「日間賀島について、自分の思いを語ったり、話したりすることができる」という質問に対しては、肯定的な回答が6人増加した。各活動を通して、改めて日間賀島についてとらえ、自分の考えをまとめたり、発信したりする活動によって「自分事として語れる子」が育ってきていると考えられる。



【実践途中のアンケートの結果】

## 5 今後の課題

(1) 修学旅行にかかわる実践について

実践途中のアンケートにおいて「将来、島に残るかわからない」「島外で暮らそうと思っているので、日間賀島についてあまり考えることができていない」と、自分事としてとらえることができない生徒も少数いた。そこで、修学旅行の訪問時における研修の内容をより工夫することで「育てたい資質・能力」の向上がはかれればと考えていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大の収束が見えず、本年度も東京方面への実施を見合わせるようになった。今後、各訪問先で予定していた活動を改めてリモートで実施する予定である。また、他校との交流での「日間賀島PR活動」を充実できるようつとめていきたい。

(2) カリキュラム・マネジメントについて

来年度以降も、本実践においてより多くの教科と連携し、横断的なカリキュラムを編成していきたい。例えば、家庭科において日間賀島の特産品を用いたメニュー開発を行った。そこで開発したメニューのポスターを美術科で描いたりできるのではないかと考えている。このような活動こそが、日間賀島の将来を担うために必要な資質・能力を育てる一助になると考えられる。今後も、よりよい実践を通して「未来の創り手となる島っ子」を育成すべく、本実践についてPDCAサイクルで検証を続けていく。